

# 地教連ニュース

2001-01-19

事務局 エルムアカデミー 〒142-0053 品川区中延 5-6-14-2f  
03-3784-5676 Fax03-3784-5609 elm@zmail.plala.or.jp  
Yzwhiro@aol.com (矢沢：地教連事務局担当)  
地教連ホームページアドレス hppt://www.tamagaku.com/chikyoren

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。

## 2001新年東西交流会のお知らせ

21世紀の幕開けの新年会を新年東西交流会として大阪で開催いたします。  
昨年9月に開催した岐阜での交流会は、岐阜地域でがんばっている仲間が多く集まり、大いに交流ができました。これを受け常任委員会は、関西地域や中京地域の会員の方々も足を運び易い大阪で新年会を企画し、「のびのび学習センター」の森岡さんのご尽力で以下の様にとりおこなうこととなりました。学習交流会のテーマは「居場所」を取りあげ、大阪と東京の報告の後、各地域の状況を報告しあっていきたいと思っています。

ぜひ、多くの方、特に関西・中京方面の方はまたとない機会ですので、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

### 記

【日時】2001年2月4日(日) 午後3時より  
【場所】「ホテル アウリーナ大阪」206会議室  
大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 06-6772-1441 (詳しい御案内は裏面に別掲)

【プログラム】 午後3時から 「学習交流会」  
大阪での居場所と不登校の報告(石井子ども文化研究所 石井守氏)  
東京での居場所と不登校の報告(地教連代表 佐藤洋作氏)  
各地域・塾での実践交流  
午後6時から 「新年懇親会」(夕食をとりながら)

【参加費】(当日会場で集めさせていただきます)

学習交流会と懇親会と宿泊の方	13000円
学習交流会と懇親会の方	7000円
学習交流会のみの方	2000円
懇親会のみの方	5000円

【宿泊について】

当日、会場の宿泊を14名分予約してあります。宿泊ご希望の方はお早めに御連絡を。

【申し込み締め切り】

会場との関係で1月26日(金)までとさせていただきます。

連絡先 エルムアカデミー 03-3784-5676 Fax03-3784-5609  
elm@zmail.plala.or.jp Yzwhiro@aol.com (担当：矢沢)

交通費は東京からだと新幹線片道で15000円程度、飛行機だと割引運賃で9000円から12000円です。

なお、東京方面からの車での参加は諸般の事情で中止いたします。

### 経費節減、御協力をお願い

方針通り、通信をEメールで送付したいと思いますので、アドレスをお待ちの方は、Yzwhiro@aol.comまで「地教連メール」と入れて下さい。

地教連のメーリングリスト(ML)も運用しています。

MLに加入すると加入者相互に意見の交換などが容易にできます。また、地教連や各地の情報もリアルタイムで入手できるのでとても便利です。

加入希望の方は webmaster@tamagaku.com (多摩学習センター：地教連ホームページ担当)まで

地教連参加塾のホームページアドレス一覧は地教連HPをご覧ください。

各塾でHPをお持ちの場合、地教連HPに申し入れれば相互リンクを張れます。

相互リンクを張ればアクセス数が伸びます。ぜひ、相互リンクを張っていきましょう。

### 会費納入のお願い

2000年度の会費をお納め下さい。なお、請求書を順次に発行予定です。

振込先；郵便局の総合口座 記号10030 口座番号64626421 地域教育連絡協議会

なお、郵便局の総合口座をお持ちの方はお近くの自動振り込み機械から130円で振り込めます。

請求会費の納入のない方は、ニュース等の配付を停止させていただくこともあります。あしからず、ご了承下さい。

2001年度地教連総会の日程のお知らせ 5月20日(日)午後からを予定しております。

# 地 教 連 情 報

2001-01-19

## カンパネラ編集部より

第6号好評発売中：巻頭インタビューは山田洋次監督「学校」に込めた想い、特集は「地域に生きる新しい力」21世紀を担う若者たちの働く現場から。

1号から5号までのバックナンバーもあります、ご連絡お待ちしております。

編集委員も募集中です。

\*年間購読の方は引き続き、ご購入の継続をお願いいたします。

お問い合わせ：学習センター 0422-47-8706

## 東京の私学の集い

1月28日(日)午前10時より午後4時半まで

大東学園高校(京王線八幡山駅下車徒歩15分)

午前) 全体会： 講演 佐藤洋作さん「青年の自立を 居場所を 考える」  
高校生の演劇「命どう宝」

午後) 教育懇談会 「いじめの相談」「不登校を考える」「生徒会を語ろう」  
「思春期の特徴と対応」「目的意識をもった進路選択」

午後) おもしろセミナー「人間の性」「光の偏向の不思議」「社会のディベート」

午後) 特別分科会 「見えていますか? 17歳の心」「21世紀の私学教育は」  
盛りだくさんの内容です。

## 子どもの居場所に関わるスタッフのためのカウンセリング講座

思春期の子どもたちの揺れる心をどう読みとり、どう寄り添えばよいのか考え、学ぶ講座です。子どもの癒しの空間をさせるスタッフのための入門講座ですので、ぜひご参加下さい。

### 【講座内容】

- |     |              |              |       |
|-----|--------------|--------------|-------|
| 第1回 | 1/27(土)5時~7時 | カウンセリングの基礎知識 | 渡辺満子氏 |
| 第2回 | 2/3(土)5時~7時  | ロールプレイ・面接技法  | 小野博美氏 |
| 第3回 | 2/10(土)5時~7時 | 思春期の心身症      | 花岡恵子氏 |
| 第4回 | 2/17(土)5時~7時 | 思春期の心理特性     | 田窪章子氏 |
| 第5回 | 2/24(土)5時~7時 | スタッフのかかわり方   | 田窪章子氏 |
| 第6回 | 2/25(日)2時~4時 | ケーススタディ      | 渡辺満子氏 |

【会場】 文化学習センター(吉祥寺駅下車15分、万助橋バス停すぐ)

【定員】 15名(先着順ですので、お早めに)

【費用】 無料(日本財団からの助成です)

お問い合わせ：学習センター 0422-47-8706

## 灰谷健次郎氏とトークの夕べ

第1部 講演「文学と人間」

第2部 トークタイム つげの高校の若者たちと灰谷健次郎  
司会 佐藤洋作

1月30日(火)夜6時半より なかのZERO 小ホール

参加費 2500円

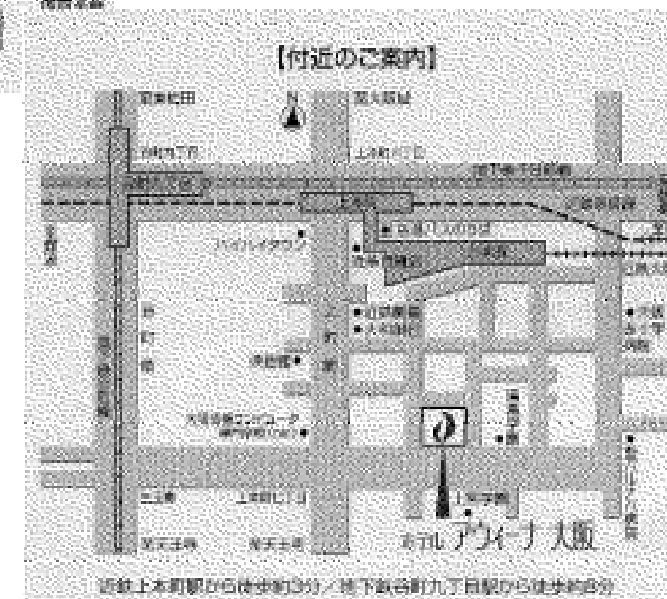
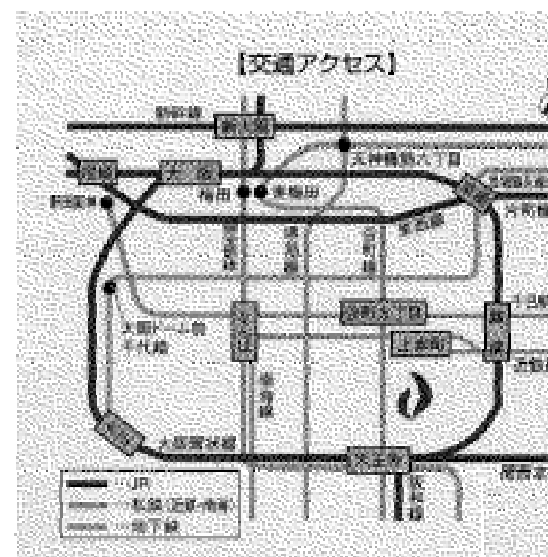
主催 黄柳野高校後援会東京支部

お問い合わせ：佐藤洋作まで 0422-47-8706

## 「いまを生きる青年たちの苦悩と希望：『学校から社会へのわたり』をめぐる」

平塚真樹さん(法政大学)の「子どもと生きる」2000年10月に掲載された原稿を転載したのでお読み下さい。

## 「ホテル アウリーナ大阪」案内図



る。事態は、不況の影響で「学校から企業へ」の道が狭まっただけではない。「学校から社会へ」、その「わたり」そのものが簡単でなくなっている、そんな感覚をもつからだ。

## 「頑張る」を問い直し始めると

私の勤務する大学にいる学生は、中学時代には概ね4や5を中心とした成績を取っており、ほとんどが学級委員か生徒会経験者だ。高校はほどほどの進学校に進学し、部活動やクラス活動に活発に打ち込み、成績上ではまあまあ平均程度。小中高時代の先生からは、友人関係にも

勉強にもバランス良く関わる頑張りやさん、と評価をされてきたのではないかと。

私はそんなごく特定の層の青年とつきあっているに過ぎないのだが、その中で感じるのは、勉強・部活・行事と何でもいいが、ともかくなにがしか頑張ってきた学生たちが、大学に入って、「自分は何であんなに頑張ったんだろう？」と、自分のそこまでをいったん問い直し始めると、途方もなく深い闇にはまりこんでしまうことがままあることだ。

ある男子学生I君は、部活の野球一筋で中高時代を生きてきて、それをやめた途端に「からっぽな自分」に直面してしまった。野球をとったら何もない。これは何なんだ。ふぬけのような状態で付属校から大学へ入学し、精神的には何もしないまま4年が過ぎる。そんな彼が、ものも考えず頑張るだけだった自分に欠けていたのは、「自分や生活を見つめる」ということだったのではないかと、自分の空洞を初めて言葉にできたのは、卒論を書く過程でだった。ほんの少し自分に安心して卒業し、教職浪人中である。

ある女子学生Sさんは、部活動にクラス活動にと何事にも活発に関わってきた。どこにいても場のムードメーカーとなれる人なつこい人柄。その彼女が大学2年になって深みにはまる。結局高校までの自分は、頑張っている自分に満足していただけなんじゃないか。頑張ることはいいことだという価値観に、疑わず乗っかってきただけなんじゃないか。就職活動をしたらあちこちで好感を持たれたであろう彼女は、「どこにも属してない自分に自分が耐えられるか試してみたい」と言って、フリーターになった。卒業して数年になるが、今でも正式採用の仕事には就いていない。「あんなことをあの頃考え始めなければ、私、間違いなく明るいOLになっていたと思う」そうやって少しまじめな顔で、今彼女は笑う。

闇のただ中にいる学生からの深夜の電話。「俺、いまかなりやばい。自分をここまで支えてきたものを、いったん崩しちゃったら、その何も支えのない状態にどうにも自分が耐えられないんだ。どうしたらいいのかわからないよ。宗教とかに走る奴の気持ち、今ものすごくわかる。」スポーツが得意で友達をつくるのが上手な、さわやかな青年がである。そんな例を挙げていけばきりが無い。

思春期・青年期がそこまでの自分をいったん崩し、より本格的な自我へと自己を再形成する時期にあることは以前から言われてきた。彼らのもがきも基本的にはそういう性格をもつものだろう。ただそばにいて痛感させられるのは、いったん崩れた後の再形成が、いまでもどうにも困難になっているということだ。もう一度踏み出す、そのギアがなかなかかからない。だから結果として、「社会」への本格的参加が遅れていく。

もちろん年代でも彼らのような場合ばかりではない。むしろ今の一〇代の中では、彼

子どもと生きる 2000年10月に掲載された原稿です。

## 「いまを生きる青年たちの苦悩と希望:『学校から社会へのわたり』をめぐる」 平塚真樹(法政大学)

### 就職しない学生たち

この夏、大学教員をしている同年代の仲間たちと、自分のつきあう学生たちの卒業後についてしゃべる機会があった。実のところ私は、自分のもっているゼミが「就職しないゼミ」との評を学生間で拝しているらしいことに、複雑な思いを抱いていたところだった。友人たちのゼミはどんなのかなあと話題を向けたら、話は驚くような展開になった。

ある国立大に勤める友人は「自分の大学の文系では、もう五割がフリーターだって言われててね」、ある地方文系私大に勤める友人は「うちもそれぐらい、もう今じゃ就職課が実態を把握できなくなってるね」、ある首都圏私大に勤める友人に至っては「うちの大学じゃ、誰かが就職が決まるとみんな『おめでとう!』って騒ぐぐらい、就職決まる方が少数派だよ」・・・私たちはなんとなく言葉をなくしてしまった。

大学を出たら企業へ就職をする、私たちはその「あたりまえ」を疑おうとしてきたつもりだ。だが現実にはその「あたりまえ」がこうも簡単に崩れつつある今、なにか戸惑ってい

らの方がむしろ少数派で、多くは、もっと早くに頑張ることから降り（させられ）、あるいは、はなから頑張ることに乗れぬままきているはずだ。だがかといって、早くに降りたり、はなから乗れなかったりした方が、もっと楽な二〇代を迎えているのかと言えば、必ずしもそうとも限らない。従来のシステムがそれだけゆるんでいるからといって、それに代わるシステムがあるわけでもないからだ。以前の子ども・青年のように、システムの強い規制を受けその抑圧で苦しむことがない分、自分を何をもってコントロールしていくか判然としない状態の、そのとりとめのなさに苦しめられる。

同年代を一括りにしてしまうことには、慎重でなければならないが、でも、私の身近な青年たちのはまり込む空洞と、はなから乗れずに来た青年たちの根深い不安定感には、やはり同質的な部分があると思えるのだ。そしてもう一言言えば、それは私たち大人自身も、抱えていながら見ぬようにしている闇でもあると。

## 『カンパネルラ』という実験

「学校から社会へのわたり」、その困難にどうつきあっていったらいいのか、考えあぐねているとき、ふとしたきっかけで関わるようになったのが、『カンパネルラ』という雑誌づくりの活動だった。

『カンパネルラ』とは、「20代が中心に企画・編集する」と銘打つ季刊雑誌である。いわゆる「大人」と呼ばれる存在は私を含めて3人、それに30歳前後の中間世代数人を真ん中に挟んで、後はいつのまにか（名簿上は）50名以上にふくらんだ青年編集委員たちで構成されている。毎回ヒヤヒヤするような綱渡りを続けながらだが、20歳前後の連中が、特集記事を考え、取材に行き、記事を書き、レイアウトし、発行している。サブタイトルに「新しい生き方・つながり発見マガジン」とあるように、20代の青年たちが、自分のこれからの働き方・暮らし方・人との関わりを考えていくために、従来の「あたりまえ」とはちょっと違った生き方を始めている少し年上の青年層を取材し、その生きざまを綴るといったコンセプトでつくられている。

この雑誌の取材を通して、私たちは徐々に、「もう一つの」学校から社会へのわたりを築き始めている青年たちを知ることになる。（詳しくは各号をご覧ください。問い合わせ先 0422-47-8706「文化学習協同ネットワーク」）

例えば1号で取材した宇津木浩一さんは、数年勤めた仕事を辞めて、たった一人から「フロン回収業」という「仕事」をつくりあげていった人だ。当初は仕事になるどころか、回収するためにお金まで払う状態であったのを、根気とアイデアで、一つずつ壁を乗り越え、今では人も雇って三多摩地域の多くの自治体から事業委託を受けるまで事業を成長させてきている。仕事は一人でやっけていても、ネットワークの広がりには実に大きい。

4号で取材した染谷ゆみさんは、数年間の遍歴の中から、祖父の代からの家業であった廃油回収業を受け継ぎ、いま、使用済みの食用油をVDFという車の燃料にリサイクルする事業を起こし、そのプラントの販売まで手がけている。さらにエコマネーを発行して、廃油と福島県の森を交換する仕組みをつくったり、地元商店街をインターネット上に開店する企画に関わりながら、地域の小売業が協同化しながら互いを支え合う仕組みを考えたりしている。

雑誌づくりと併行して行われたSchool to Workセミナー（『カンパネルラ』4・5号参照）で話をうかがった矢口岳さんは、大学受験に二度失敗するうちバイトでやっていた調理の仕事に本格的に進む気持ちになる。調理師免許も取らず、たたき上げで店を任されるまでなるが、数年後そこを辞めてヨーロッパに修行の旅に出る。いまは再び雇われシェフで腕を振るっているが、夢は、地元の人が集い語らう拠点となるような小さなコミュニティレストランを開くことだという。食を預かるとはいのちを預かること、だから日々ものすごい緊張を強いられるし、だからやりがいがあると語ってくれた。

みな、取材する側が思わず勇気づけられ元気づけられる青年たちだ。

## 生の意味への希求

彼らに留まらず、多くの取材先や記者たる編集委員たちから感じるのは、自分自身を表現する仕事や活動をしたい、もっと言えば、自分そのものを仕事や活動にして生きていきたい、そういった願いが彼らの中に強くあることだ。それは、痛烈な「生の意味」の実感への希求であるようにも思う。自分の働きかけや関わりが、何かある具体的な意味をなしていると、そのような実感が自分に返ってくる活動や仕事。環境であれ食であれ、自分が気になっていたり好きだったりするものを通して、自分と社会が具体的に繋がっていると感じられること、自分がいま社会に何かを刻みつけていると実感できること、そのような生を希求しているように私には感じられるのだ。

そのような彼らからしたら、従来の「わたり」の先にあるものは、（必ずしも企業社会だけがでなくもっと広義の仕事や活動の世界含めて）、自分と働きかけた社会とのつながりが複雑すぎて、自分一個の意味が実感しにくいと感じるだろうし、利益に一元化された世界は、なにがしか自分が世界にとって「価値」ある存在でありたいと願う者たちにとっては、その価値のイメージがひどく窮屈で貧弱に映るだろう。

こうして考えてみると、いったん自分崩した青年たちが、あるいははなからもてあまし気味できた青年たちが、社会を目前にして、立ち止まり途方に暮れても不思議はない。彼らにとって目前に見える社会は、まだ圧倒的に従来のシステムに組み込まれたそれであるのだし、『カンパネルラ』で知り得る「もう一つの」動きは、それを知り合う仕組みが未成熟であるだけでなく、そうした動き自体がまだまだ未成熟であり、要するに、そっちの世界に進もうとしたら自分自身でつくっていくしかないのだ。踏み出すことをひるむとしても不思議はない。

## 生きる意味なんて大事なの？

では私たちおとなは、この状況の中で何をしていけばいいのだろうか？

もちろん、彼らが容易には踏み出しかねる「もう一つの」道を、一緒になって開拓していくことも一つの大事な仕事だろう。だが私のなかには、それだけでいいのか、それでは何か単純すぎないか、という迷いもある。

『カンパネルラ』4・5号で連続して、いわゆる「少年事件」の多発に端を発した「同じ時代を生きる同じ世代の『自分』」という座談会が組まれている。その中で一人の青年

が一貫して、「意味」なんてことばかり追いかけていいのか？とこだわっている。彼は自分自身でも「何か意味のある仕事でなくちゃいやだ」と思い、それにまだ巡りあえないから今はフリーターをしている。でも一方で彼は同時に、「やりがいのある仕事をしたいというのは消費社会的なんじゃないか」とも考えている。さらに「食うために生きているような人は『意味』なんて考えないよ」ともいう。この発言に私はハッとした。

「自分がちっぽけであることを受けとめたら、やりがいのある仕事もいらなくなるんじゃないか」という彼の言葉を聞きながら、考えた。社会を前にして戸惑い・ひるむのは、彼らがずっと足を踏み出せる世界がそこに豊かにないからでもあるだろうが、一方で、彼ら自身がずっと足を踏み出せるような「身軽な」自分を獲得できていないからでもあるのではないか。どんなにじっくりくる世界に出会えたとしても、自分一人の力はちっぽけだし、世界は容易には動かない。でも、それでいい、ぼちぼち諦めずに行こうではないかとそこで思えるとしたら、それは自分という人間を、小さすぎず大きすぎず要するに等身大で引き受けられているからなのではないか。

この座談会で彼らは何度となく「素の自分をなかなか認められない」ことが自分たちの生きづらさだと語っていた。私たちおとなが彼らと一緒に格闘すべきは、むしろまずもってこの生きづらさとなのではないか。ここを乗り越えていったとき、彼らはきっと自力で「もう一つの」道の開拓主体になるはずだ。

「フィクションに拠らずに、どうやって「頑張ること」を納得できる形でとらえ直せるだろう」座談会の締めくくり近く一人の青年が、オウムのようなフィクションでしかない「もう一つの世界」と区別しながら、こう語った。心底から、こんな彼らと共に生きていきたいと願う。

## あらぐさ教室より

伊豆大島の別荘ご利用のご案内

素泊まり1泊2000円(おとな)、宿泊用品、什器すべて完備

港・海近し、温泉もあります。観光、つり、リフレッシュに最適です。

10人程度まではOK。

お問い合わせ：橋美枝子 044-287-7313

## 地教連ホームページ

地教連ホームページには地教連の最新情報や各塾の行事なども掲載されています。ぜひ、アクセスして下さい。

**アドレスは** [hppt//www.tamagaku.com/chikyoren](http://www.tamagaku.com/chikyoren)